副理事長挨拶

副理事長　わたなべひろこ

クリエーターの自覚と意志が未来を拓く。

21世紀はアジアの時代といわれるが国際市場に立つ日本の将来は安穏としたものではない。新世紀を目前に控えて私達は今迄歩んで来た道を問い直し新しい時代への思索と役割を計らねばならない。

かつて日本には世界に誇れる染織の伝統文化と栄光の繊維産業があったが、時代の推移はこれを崩壊させ衰退させてきた。

この繊維産業の空洞化が危惧されるなかで日本テキスタイルデザイン協会が設立されたことは大変意義のあることと信じている。

将来の繊維ビジョンを展望してゆく為にはワーキング部門を支えるクリエーターの質と向上が問われなければならない。資源を持たぬ日本の産業の活性化を確かなものにする為には、テクノロジーと感性とビジネスマネージメントの良き結び付きが急務な課題となる。

この重要性を自覚しその役割を果すべく集ったクリエーター有志の呼応が草の根運動的に拡まりこのたびのデザイン協会結成に発展したと思う。

今迄テキスタイルデザイナーは消費者と遠い位置にあり、企業組織の中に埋もれた大変弱い立場であった。意匠権すらない現場で懸命に生き抜いて来た。

勿論、真の協会活動は行政や企業、他団体との提携や支援なしに成果をなし得ないが、テキスタイル協会員は従来のパターンデザイナー、テキスタイルデザインディレクター等にとどまらず、新しいニーズの中で素材、糸、加工を通して布づくりに携わるテキスタイルプランナー、更にテキスタイルコーディネーター、テキスタイルプロモーターなど、テキスタイルクリエーションとビジネスに関わる人達であり、心を束ねて明日を拓く新しい力となって繊維産業の発展と生活文化の向上に貢献する役割を果さねばならない。

副理事長　山口道夫

ご挨拶にかえて。

4年前のある日、有志の人達の間でテキスタイルデザイナーの協会を作りたいという動きがあることを知った。

過去に幾度も聞いたり、仲間達や自分でも考えたこともあったが、全て実現しなかったことだった事もあり、正直又その話が出てきたかという感想が正直な気持だった。近々に会合を持つもので出席してほしいとのことで、初めての人、顔見知り、友人の数人の方たちに会い、そこで情熱と熱意、希望を感じた。

デザイナー協会ではなくもっと幅広く、テキスタイルにデザインを通して関わっている人達の協会にしたい考えであることも聞き、私はためらうことなく賛同し、意見も出させてもらった。

それから3年の間、数多くの会合を持ち多くの人達の意見を聞き、揺らぎながらも少しずつ方向が固まっていったが、その道程はかならずしも平坦なものではなかった、というより険しいものであったといってよい。今のやり方では協会など出来はしないといった意見も出され、一時はどうなることかと心配した時期もあった。

基本的な方向で意見が分かれたり、呼び掛けの方法や、組織構築の手順で意見が割れたり、いろいろなことがあったが、それもより良い協会を作ろうとするが故の、紆余曲折、試行錯誤であり、一つずつの意見を検討して行くことが、出来上がる組織の地盤がためにつながることと、皆粘り強く投げ出さずに話し合った。

京都の会合で、準備会の代表に上野氏(現理事長)が決まり、そのうちに準備委員会も発足し役割の分担などが明確になり始めて、やっと先が見え始めた。

この時点までに2年が経過し、最初の段階で呼び掛けをし賛同をいただき、いち早く入会していただいた人達や、企業の方々には設立が遅れ大変ご迷惑を掛けてしまい、申し訳ないことをしました。この件に関し紙面を借りてお詫びいたします。

今、「日本テキスタイルデザイン協会」が、多くの方々の賛同とご理解、ご好意により設立出来た喜びのなかで、感謝の気持で一杯です。今後とも叱咤激励と、ご理解ご厚情の程をお願いいたします。また何よりも、仕事を投げうってまでの、たゆまぬ努力を重ねられた、準備委員会の方々に心よりの敬意を表します。

当協会は、言わば進水式が終ったばかりの船であり、今装備を整えクルーを配置して実働する4月の船出のための準備をしている段階です。この先の航海に多くの試練や苦労が待ち受けているわけで、それらを乗り越えつつ目的に向かって、実り多い良い航海をして行かなくてはならないのです。

より良い、テキスタイルデザイン環境作りと、明日の輝かしいテキスタイル世界のために、皆で、知力をだしあい、努力していく必要があるのです。

副理事長に就任いたしまして、重い責任の中で、出来る限りの努力をしてまいる覚悟でいます。会員各位、関連機関、行政のご協力、ご支援を宜しくお願い申し上げます。